



# 絆プロジェクト

～ 日常実践の充実を目指した教育活動へのチャレンジ ～

環境

ICT

体力向上

国際理解

キャリア

平成28年9月26日発行  
No 8 文責 小林

## 学習指導要領改訂の背景と動向

先日、「北海道小・中学校教育課程改善協議会」に参加してきました。学習指導要領改訂に向けて、各学校でどのように準備を進めていかなければならないかを、その背景と動向を踏まえながら考える貴重な機会でしたので、簡単にですがご報告させていただきます。

### 1. 「これからの子どもたちに求められること」

グローバル化や情報化が進展している昨今、今の子どもたちの65%は、「現在、存在していない職業に就くだろう。」と言われていました。また、今後20年程度で、半数近くの仕事が「自動化」される可能性が高いとの予測も出ています。そんな社会の加速度的な変化の中で、社会的・職業的に自立した人間として、伝統や文化に立脚し、高い志と意欲をもって蓄積された知識を礎としながら、膨大な情報から何が重要なのかを主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指すと共に他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことができる子どもたちを育成することが、今の学校には求められています。そのために学校は、広い世界に目を向け、社会や世界と積極的に接点をもちながら多様な人々との繋がりから学ぶことのできる「社会に開かれた環境」となることが不可欠なのです。

### 2. 「社会に開かれた環境とは」

学校が「社会に開かれた環境」であるためには、学校の教育計画である「教育課程」が、社会に開かれる必要があります。そのために大切なことは、

- ① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れた教育課程を編成し、その目標を地域社会と共有する。
- ② 「これからの社会を切り拓いていく力とは何か」を教育課程において明確にする。
- ③ 地域の人的・物的資源を活用し、目的を地域社会と共有・連携しながら「共有」していく。

簡単に言うと、「社会情勢や地域の特長を生かした幅広い視野をもった教育課程を編成し、地域社会と情報を共有しながら協力して子どもたちの教育にあたる。」ということです。よって、私達は、これからの大きな社会の変化から子どもたちに必要な能力を見極め、その育成のために、地域社会や学校の環境をどのように活用していくのかを考えて教育課程に反映させていくと共に、教科の本質的な意義を大切にしつつ、幅広い視点で教科間相互の関連を図ることで、単独では生み出し得ない教育効果を得られるように工夫・改善していくことが求められているのです。

#### 学習指導要領と教育課程

「学習指導要領」・・・全国どの地域で教育を受けても一定水準の教育が受けられるようにするために定められている各学校の教育課程を編成する国の基準。

「教育課程」・・・教育の内容を各学年の発達段階に応じ、授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画。

### 3. 「教育課程を編成するまでに・・・」

教育課程を編成する前に必要なことは、まず、学習する子どもたちの視点に立ち、教育課程全体や各教科の学びを通して①「何ができるようになるか」という観点から育成すべき資質・能力を整理する必要があります。そして、それらを育成するために②「何を学ぶのか」という必要な指導内容を検討し、その内容を③「どう学ぶのか」という具体的な学びの姿を考えながら構成していく必要があるのです。さらには④「子どもの発達を

どのように支援するか」⑤「何が身についたか」⑥「実施するためには何が必要か」など、内容のみではなく、その後の支援や評価、教育環境にまで視野を広げて考えていなければなりません。このようなカリキュラム・マネジメントを通じて、学校教育の改善・充実の好循環を生み出すことを目指し、各学校の教育課程は編成されていくのです。

#### 4. 「カリキュラム・マネジメントの3つの側面」

学校教育の充実を図るために必要な「カリキュラム・マネジメント」には、3つの側面があります。

- ① 各教科の教育内容を相互の関係でとらえ、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育内容を組織的に配列していく。
- ② 教育内容の質の向上に向けて、子どもたちの姿や地域の現状等に関する調査やデータに基づき、教育課程を編成し、実施・評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立する。
- ③ 教育内容と教育活動に必要な人的・物的資源等を地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせる。

こうした「カリキュラム・マネジメント」は、管理職や教務主任だけでなく全ての教員がかかわり、学校教育目標や目指す資質や能力を明確にしながら、各教科等がどのような役割を果たすことができるのかという視点をもって進めていく必要があるのです。

#### 5. 「アクティブ・ラーニングの意義」

次期改訂の視点は、子どもたちが「何を知っているか」だけではなく、「知っていることをつかってどのように社会や世界と関わり、よりよい人生を送るか」ということであり、知識・技能、思考力・判断力、表現力等、学びに向かう力や人間性など情意・態度等に関わるもの全てをいかに総合的に学んでいくのかということにあります。それを引き出す一つの視点として「アクティブ・ラーニング」が位置付けられています。「アクティブ・ラーニング」とは、形式的に対話を取り入れた授業や特定の授業の型を目指したものに留まるのではなく、質の高い学びを引き出すことを意図するものであり、さらに、それを通してどのような資質・能力を育むかという観点から学習のあり方そのものの問い直しを目指すものです。よって、決して授業の型ではなく、その視点をもって授業改善をするというものです。

### カリキュラム・マネジメントとPDCAサイクル

「カリキュラム・マネジメント」・・・教育目標の実現に向けて、子どもや地域の実態を踏まえ、教育課程を編成、実施、評価し、改善を図る一連のサイクルを計画的・組織的に推進していくこと、また、そのための条件づくりや整備のこと。

「PDCAサイクル」・・・Plan（計画）Do（実行）Check（評価）Act（改善）の4つを繰り返すことで、業務を継続的に改善するサイクルのこと。

#### 6. 「最後に・・・」

今回、この研修に参加させて頂いて感じたことは、言葉は難しいことが並んでいますが、内容はそんなに難しくはないということです。それというのも、次期改訂に向けての動きは、もう既に豊成小の先生方が動き始めていることばかりだったからです。

例えば、これからの子どもたちに求められている課題は、まさにキャリア教育の目指すところであり、豊成小学校では、自校の特色を生かした教育課程を編成し、その基盤ができつつあります。それによって、地域社会のたくさんの方々との繋がりもでき、子どもたちだけではなく、私達の視野も広がったように感じていますし、PDCAサイクルを意識したカリキュラム・マネジメントも、学校評価をはじめ、道徳の保護者アンケートや学習規律の反省会議など、日常的に振り返り、改善していくという校内体制は整っています。学校内外の意見を積極的に取り入れ、教育活動の充実に生かしていく。そして、その課題や成果を発信し、共通理解のもと地域社会と協力して教育するという関係が、この豊成小学校にはあるのです。

次期学習指導要領の改訂に向けての動きは、これからどんどん本格的になっていきます。「現在でも慌ただしいのに、これ以上どうすればいいの？」と不安を感じる先生方もいらっしゃるかもしれませんが、私は、次期改訂に向けての混乱は豊成小学校にはないと確信しています。今まで少しずつ積み上げてきた努力が改訂に向けての取組であり、それが日常となっている今では、その充実に向けて今まで通り頑張っていれば、十分乗り切れると思います。